

「基礎情報学による『リヴァイアサン』再読」

“Reinterpretation of *Leviathan* by Fundamental Informatics”

大学院国際学研究科 加藤 朗

キーワード：基礎情報学、ホブズ、リヴァイアサン、オートポイエシス・システム、情念

目次

はじめに

1. 基礎情報学とは何か。
2. 生命システムから社会システムへ
 - (1) 生命情報とは何か
 - (2) 心的システムから社会システムへ
 - (3) 社会システムの創発

おわりに

引用文献

主要参考文献

はじめに

近代政治学の始祖であるホブズは、「自然（神がそれによってこの世界をつくったし、それによってこの世界を統治している、その技術）は、人間の技術によって、他の多くのものごとにおいてのように、人工的動物を作りうることにしても、模倣される」（ホブズ、『リヴァイアサン I』〔以下 I と略〕 37）（ルビ、傍点、訳書）と、主著『リヴァイアサン』の序章の第1行目に動物を人工的に創造できると記している。そしてホブズはより具体的に、発条と車で動く機械仕掛けの時計のような自動機械を例に、ばねを心臓とし、神経を紐とし、関節を車とする、人工的動物を創造できると作りうるとする。さらに続けてホブズは、「技術はさらにすすんで、自然の理性的でもっともすぐれた作品である、人間を模倣する。すなわち、技術によって、コモン-ウェルスあるいは国家（ラテン語ではキウィタス）と呼ばれる、あの偉大なリヴァイアサンが、創造されるのであり、それは人工的人間にほかならない」（ホブズ I 37）（ルビ、傍点、

訳書)と述べ、国家という「人工的人間」の創造を主張した。

その上でホッブズは、

「この人工的人間の本性を叙述するために、私は、

第一に、その素材 *Matter* と製作者、それらはともに人間である。

第二に、どのようにして、どういう諸信約によって、それはつくられるか、主権者の諸権利および正当な権力あるいは権威 *Authority* とは何か、そして、何がそれを維持し、解体するか。

第三に、キリスト教的コモン-ウェルスとは何か。

さいごに、暗黒の王国とは何か。」(ホッブズ I 38) (ルビ、傍点、訳書)

と、『リヴァイアサン』の主題を提示している。

本研究ノートの第一の問題意識は、ホッブズを始祖とする近代政治学は第二の主題ばかりを重視し、第一の主題を軽視していたのではないか。つまり社会学や政治学では理性的、合理的な社会的人間の関係、あるいは国際政治学では「人格化」された「人工的人間」すなわち国家の関係を重視し、「人工的人間」のモデルとなった生命体としてのヒトすなわち生物的人間の考察を軽視していたのではないか、ということにある。

実際、ホッブズは、「人工的人間」である国家とは何かを考察するにあたって、「その素材 *Matter* と製作者」である人間について、『リヴァイアサン』第一部「人間について」で、当時の力学の知識をもとに、生物的人間の本性¹とは何かについて詳しく論究している。そしてホッブズはその生物的人間の本性に関する考察に基づいて、第二の主題すなわち人工的人間の本性を考察しているのである。

第一部「人間について」のうち、特に感覚や情念、態度を扱った第11章までがあまり重視されなかったのは、ホッブズの「身体の諸能力と精神の諸能力」(ホッブズ 『法の原理』、20)に区分できる生物的人間の本性に関する考察が作用・反作用の力学に基づいており、生命科学、進化生物学、心理学、言語学等の現代科学の水準からみれば科学に値しない内容であったからではないか。また、ホッブズ自身も人間の争いの原因の一つに「誇り」(ホッブズ I 210)を挙げたことから、自然状態ではなくすでに人間の相互の評価基準のある社会状態を前提にした社会的人間の存在を認めたかのような記述がある。そのため『リヴァイアサン』はもっぱら、ゲーム理論の前提となる「人々が功利的に利害を追求するとき、いかにして社会秩序は可能か」というタルコット・パーソンズが提起したホッブズ問題に象徴されるように、本性のうちの体力、経験、感情に支配される生物的人間ではなく理性²に基づく社会的人間を前提とした社会学や政治学あるいは政治思想、政治哲学の書として研究の対象とされてきたのである。

しかし、そもそもホッブズは社会的人間を前提とした国家論を否定し、生物的人間の本性に基づく国家論を目指して、『リヴァイアサン』に至る一連の著作を執筆したのである。『法学要綱』に次ぐホッブズの第二作目にあたる『市民論』では、ギリシア人たちのいわゆる「国家的動物」を前提にして国家を議論することは、「人間の本性についてのあまりにも軽率な考察に由来する誤謬である」(ホッブズ、『市民論』、31-32)と、社会的動物としての人間を前提にした秩序論を明確に否定しているのである。

次に、本研究の第二の問題意識は、第二部「人工的人間」としてのコモン・ウェルスの本性の問題である。『リヴァイアサン』のそもそもの目的は、国家の本性を明らかにすることにあった。ホブズは国家を人間の似姿である「人工的人間」すなわちリヴァイアサンとして「人格化」することで人間の本性の類推として人工的人間の本性を明らかにしようとした。『リヴァイアサン』の口絵でリヴァイアサンが多数の人間からなる人間の国王の姿に似せていることでも明らかかなように、『リヴァイアサン』では国家は擬人化された実在として描かれている。

ホブズは人工的人間であるリヴァイアサンを次のように人間に譬える。

主権は全身に生命と運動を与える人工の魂。為政者や司法、行政の役人は人工の関節。賞罰は神経。富と財産は力。人民福祉は業務。顧問官は記憶。公正と諸法律は、人工の理性と意志。和合は健康。騒乱は病氣。内乱は死。そしてリヴァイアサンは、それを構成する自然人を保護し防衛するように、意図されている(ホブズ I 37-38)。

しかし、国家は生物的人間のように実在するわけではない。国家はそもそも制度であり、制度に基づく組織の集合体でしかない。しかも国家はあくまでも人間の認識であり、間主観である。したがって、国家は、人間の本性のような意味では、本性を有してはいない。

この国家の本性の問題は国家の人格化の問題として、国際政治学では常に議論の対象となる。というのも国際政治学では、国家はあたかも一人の人間のように擬人化され、生物的人間と同様の本性を持つ「擬似生物的」人工的人間として人格化されるからである。その結果、国際政治学では生物的人間の本性に基づく「万人の万人に対する闘争」の自然状態の類推から、国際社会を生物的人間同様に本性をもつ「人工的人間」が相対峙する「万国の万国に対する闘争」とみなすようになった。他方、国際法が前提とするように³、国家は道義を備えた人格性を備えた主体でもあり、したがって国際社会は必ずしも生物的人間の本性ばかりに基づく「万国の万国に対する闘争」の自然状態とみなされているわけではない。ヘドリー・ブルが『国際社会論』で主張するように、そこには無政府ではあるが道義や理性に基づく国際社会が存在する。つまり生物的人間の本性と「擬似生物的」人工的人間としての国家の本性は必ずしも一致するわけではない。こうした生物的人間の本性からの「擬似生物的」人工的人間としての国家の本性の類推が国家の人格化の誤謬問題を惹起しているのではないか。

以上二つの問題すなわち生物的人間に基づく国家の形成そして国家の人格化による「擬似生物的」人工的国家の本性の類推問題を考察する分析枠組みとして、本研究ノートでは、西垣通の『基礎情報学』を用いて『リヴァイアサン』を再読する。『基礎情報学』に「生命から社会へ」と副題が付けられていることから明らかかなように、基礎情報学は生命情報に基づく生命システムや心的システムからいかに社会情報に基づく社会システムが形成されるかを扱う新たな情報学である。この分析枠組みを用いれば、ホブズが生物的人間から「擬似生物的」人工的国家であるリヴァイアサンを立ち上げた過程を、生命情報に基づく人間の本性がいかに社会情報としての国家の本性に間主観として構成される過程として明らかにすることができる。言い換えるなら、「人々が功利的に利害を追求するとき、いかにして社会秩序は可能か」というホブズ問題を情報という視点から解明する展望が開ける。

さらにこのような生物的人間に基礎を置く政治学とりわけ国際政治学の読み直しは、国家を擬人化し合理的人間を前提とする経済学モデル（たとえばケネス・ウォルツの国際関係論）や、あるいはビリヤードの球のように国家を物体化し物理法則に基づいて国家の行動を明らかにしようとしてきた物理学モデル（たとえばモーゲンソーの勢力均衡論）に基づくこれまでの国際政治学とは異なる、あらたな生物学的視点を国際政治学に提供するであろう。

ところで、そもそも政治は人間の技であるがゆえに、生命体としての人間に基づいて政治を解明しようとする試みは古くからある。柚正夫によれば、「人間の本質を生物学的に関連づけて把握し、その本質を基礎に政治社会を論じた学者として最初に挙げるべきは、アリストテレスであった」（柚 168）。以降、柚はトマス・アクィナス、マキャベリ、ホッブズ、ロック、マルサス、エンゲルスらの政治思想に見られる生物的人間像について触れている。ダーウィンの進化論以降はコント、スペンサーやバジヨットらが社会学と遺伝学の融合である社会進化論を展開している。この社会ダーウィニズムがやがてゴルトンが主張する優生学へと応用されるにつれ、生物進化学の政治学への適用は次第に忌避されるようになった。しかし、森川によれば、1980年代に入って生命科学の進展とともに欧米を中心にネオダーウィニズムの影響を受けて、新たに「進化政治学」の分析手法が開拓されてきた。

加えて、生物学そのものを分析手法とするのではなく、情念、情動、感傷、心情など、これまで政治学、社会学、経済学では非理性的として軽視してきた生物学的人間の心に焦点を当てて政治を考察する情念の政治経済学や情動の政治学の分野が最近開拓されつつある⁴。基礎情報学から政治学を読み直す本論の問題関心の根底にも、情念の政治学と同じく、人間の情念や感情が政治にどのように影響するかにある。

1. 基礎情報学とは何か。

基礎情報学とは何か。まずは、前述の第一、第二の問題意識を下敷きに、西垣通の『基礎情報学』を分析枠組みに、『リヴァイアサン』を読み直していきたい。

【基礎情報学とは何か】

基礎情報学は、「情報から社会をとらえ直す必要性に応えようとする」（西垣 a 201）（以下、西垣の著作aの場合aを省略）新たな学問領域である。すなわち基礎情報学は、生物の一種であるヒトという生命体から見た情報概念すなわち「生命情報」をから出発し、ヒト特有の「心的システム」、ヒト同士のコミュニケーションからなる「社会システム」を考察する（西垣 199）。誤解を恐れずにいうなら、情報から社会秩序の形成の問題すなわちホッブズ問題を考察する試みである。

他方ホッブズは生命体を「自動機械 Automata」（ホッブズ I 37）つまりは力学的運動体とみなし、ヒトという自動機械を模して、人工的人間を作ろうとした。そのためにホッブズは「人びとを読む〔知る〕」ことが必要と考えた。すなわち「ひとりの人間の諸思考と諸情念、他のひとりの諸思考と諸情念に類似しているために、だれでも自分のなかをみつめて、自分が思考し判断し推理し希望し恐怖し等々するとき、何をするか、それはどういう根拠によってかを、

考察するならば、彼はそうすることによって、同様なばあいにおける他のすべての人びとの諸思考と諸情念がどういうものであるかを、読み、知るであろう」(ホップズ I 39)。つまり、ヒトを「自動機械 Automata」と見なした上で、この自動機械を動かす力とは何かを見出そうと生物的人間を力学的視点から徹底して観察し、そして人工的人間を創造したのである。

このように、西垣の基礎情報学においてもホップズのリヴァイアサンにおいても、議論の枠組みは力学と情報学という差はあるものの、両者の議論の出発点はいずれも生物的人間にある。

【基礎情報学のテーマ】

基礎情報学のテーマは、以下の二つである(西垣 008)。

- ①情報の意味作用はいかにして生まれるか。
- ②情報の意味作用はいかにして社会的に共有され、社会的リアリティを形成するか。

この問題設定は、人間とは何かそして人間はどのようにして国家をつくるかをテーマにした『リヴァイアサン』と本質的に何ら変わるところはない。ホップズはヒトを本性に還元し、西垣はヒトを情報に還元した。その上でホップズは統治の支配／被支配を秩序原理とする国家、西垣は後述する「階層的自律コミュニケーション・システム (Hierarchical Autonomous Communication System:HACS)」(西垣 b 021-033)に基づき階層的な社会秩序がいかに形成されるかを考察している。一見すると、両者の目的は全く異なっているように思えるが、実際のところ、ホップズの「本性」を西垣の「情報の意味作用」(西垣 200)、逆に西垣の「情報の意味作用」をホップズの「本性」と読み替えれば、実は、西垣のHACSはホップズが構想した国家の形成過程を情報から明らかにする試みと言える。

【基礎情報学の特徴】

基礎情報学の特徴は、意識をもった主体としての「人間」を前提とする従来の人文科学とは異なり、「生物の一種としてのヒト」すなわち生物的人間から出発し、意識としての「心的システム」の考察を経て、「社会をつくる生物としてのヒト」すなわち社会的人間をとらえ直す。「生物の一種としてのヒト」として人間を他の生物同様に扱うことから、人間特有の意味処理手段としての「言語」に限らず、より広く生物の意味処理手段としての「情報」を中心テーマとする(西垣 200)。

ホップズもまた、人間についての考察をまず「第1章 感覚について」から始めていることでもわかるように、「生物の一種としてのヒト」から始めている。この「生物の一種としてのヒト」の生命的感覚から、次に記憶や夢、幻想などの心について、そしてことばや人間の感情や情念、思考など意識の考察へと論究し、そして自然状態における人間に関する考察へと進み、「生物の一種としてのヒト」から「社会をつくる生物としてのヒト」への転換の機序を明らかにし、そして「社会をつくる生物としてのヒト」がいかに国家を構築していくかを構想していくのである。

【基礎情報学の分析手法】

基礎情報学は情報を「生命情報」、「社会情報」そして「機械情報」の三種類に分類する。

第一の「生命情報」とは、基礎情報学における広義の情報であり、DNA/RNAの遺伝情報、代謝情報、免疫情報、神経情報など生物にとって「意味」のあるものはすべて生命情報である(西

垣201-2)。この生命情報の大部分は、生命情報を受信した生物が、その「意味」を解釈し、刺激を受けて自らの生命体としての構造を変化させたときに生まれる情報である（西垣 202）。つまり生命体内部の情報で、西垣はこれを、「あくまで潜在的・原基的な情報にすぎないものであり・・・原-情報」と呼ぶ（西垣 073）。

ホップズもまた『リヴァイアサン』で、西垣の生命情報に相当する記述がある。それは「第一章 感覚について」である。感覚の原因を、外部の物体が人間の感覚器官を圧迫し、その圧迫が神経や筋や薄膜を媒介して頭脳と心臓に至り、反対圧力が生じて感覚を生ずる。ホップズは感覚を作用・反作用の力学的運動の結果ととらえている。この感覚こそが、西垣のいう生命情報の一部である。詳細については、後述する。

第二の「社会情報」とは、この生命情報を、観察者が観察し、抽出し、外部の伝播メディア⁵上に記述することにより出現する情報であり、基礎情報学が主として対象とする狭義の「情報」である（西垣 203）。生命情報を外部の伝播メディア上に記述するためにはことばが必要である。ホップズは「第四章 ことばについて」そして「第六章 普通に情念とよばれる、意志による運動の、内的端緒について。およびそれらが表現されることば〔について〕」で情念すなわち生命情報がことばとして記述される過程を明らかにしている。ことばによって記述された生命情報は、小説や絵画なども含め、人間社会において意味作用をもつものすべてを指す社会情報となる（西垣 204）。

『リヴァイアサン』では、主に生命情報に基づいて構想された「第二部 コモン-ウェルスについて」が社会情報に当たる。さらにそのコモン-ウェルスをもとに批判的に検証された「第三部 キリスト教のコモン-ウェルスについて」そして「第四部 暗黒の王国」について記された内容もまた社会情報である。さらに、『リヴァイアサン』そのものが言葉によって記録された社会情報である。

第三の「機械情報」とは、「社会情報の意味内容が潜在化し、表現形式である「パターン」という面だけをもつ情報である。情報を担うパターンの伝達や蓄積の効率化を実現するのが伝搬メディアであり、たとえばコンピュータを利用したIT（情報技術）である。機械情報は社会情報の変換型であり、時空を超えて社会情報を伝達するための過渡的な存在である（西垣 204）。ただし、「機械情報は情報工学／情報科学の対象であり・・・基礎情報学の主な対象ではない」（西垣 205）。したがって、本論でも、機械情報は扱わない。

【基礎情報学の分析対象】

基礎情報学では、オートポイエティック・システム（後述）の分析枠組みを用いて、生命情報によって維持される生命システム、そしてヒトの内面に形成される心的システム、ヒト同士のコミュニケーションによって構築される社会システムを分析対象とし、生命から社会への秩序の形成過程を解明しようとする。これはホップズが『リヴァイアサン』で試みた、作用・反作用の力学的運動の分析枠組みで生物的人間の感覚（生命システム）から情念や思考などの意識（心的システム）に基づき、人工的人間である国家（社会システム）の秩序形成の過程と全く同じである。

基礎情報学においても『リヴァイアサン』においてももっとも重要なのは、生命システムから心的システム、心的システムから社会システムへの転換の機序の解明である。言い換えるならば、その解明こそが、ホップズ問題すなわちいかにして秩序が形成されるかについての回答につながるからである。

2. 生命システムから社会システムへ

(1) 生命情報とは何か

まず、基礎情報学の主要テーマは「生命情報から社会情報が形成されていくメカニズムを問う」(西垣 019) ことにある。この問題設定は、生物的人間の本性から国家がどのようにして立ち上がるかというホップズの問題意識に重なり合う。

【オートポイエシス・システム】

生物学を前提にして政治学を考えると、まずは生物的人間とは何かが問われなければならない。

ホップズは、リヴァイアサンを自動機械とみなしていることでも明らかなように、生物的人間を力学的運動体とみなしている。すなわち動物には、生命を維持するための生命的運動と動物的運動すなわち意志に基づく運動がある、という。そしてこの意志がどのように形成されるかを力学的運動という視点から、「人間の身体の諸器官と内的諸部分の運動である」感覚や、「感覚のあとに残った同一の運動の遺物である」想像が端緒となって努力する意志が生まれるのである(ホップズ I 97)。西垣に従えば、心的システムの形成である。

こうした力学的運動観に基づき機械との対比で生物的人間を力学的運動体と理解するホップズとは対照的に、基礎情報学では「オートポイエティック・システムを生命体のシステムと定義する」(西垣 067)。基礎情報学が依拠するオートポイエシス・システム(Autopoiesis System: 以下APSと略)⁶とは、1970年代初頭にチリの生物学者ウンベルト・マトゥラーナとフランシスコ・バレーラによって提唱された生命の有機構成に関するシステム論である。APSは生物学を超えて、法社会学、心理学などさまざまな研究分野への応用が試みられている。中でも社会学への応用としてタルコット・パーソンズのホップズ問題をAPSで考察したニクラス・ルーマンの『社会システム理論』が有名である。基礎情報学は、APSの情報分野への応用である。西垣は基礎情報学で、これまでのコンピュータやネットなどの機械情報に焦点を当てた情報学とは一線を画し、生命システムをAPSととらえ、情報という視点から心的システムそして社会システムを考察した。

本研究ノートではAPSそのものについては問題関心から外れるので、深く立ち入ることはせず、APSの中核的な仮説を述べるにとどめる。

APSの四つの特徴は自律性、個性性、境界の自己決定そして入力と出力の不在にあるといわれるが、最大の特徴は行為者と観察者の視点の転回すなわち「システムの内側に視点を移すこと」(西垣 b 023) である。四つの特徴は、すべて視点の転回に由来する。これまでのシステム論は常にシステム外の観察者がシステムの構造や機能を外部から観察してきた。システムが

どのように自律しているか、どのようにシステムの個体を維持しているか、システムの境界はどこにあるのか、そしてシステムにどのような入力・出力があるのか、これまでのシステム論ではこれらを決定するのは第三者である観察者である。(河本 155-161)

他方、APSではシステムの行為者自らがシステムを規定しているのである。行為者から見れば、システムは自律しており、システムの個体は維持され、システムの境界は自らの行為が決定しており、その結果外部から何か入力があるとか、それに対応して何か出力したなどということは、行為者にとってはなんら意味を持たない。

基礎情報学は、APSの視点の転回の影響を受けて、行為者の情報そのものの意味作用から生命システム、心的システムそして社会システムの形成を明らかにしようとする試みである。その際基礎情報学は、APSの特徴のうち自律性を重視するために「観察者」の視点を取り入れ、いかにAPSに「拘束」や「制約」が加えられ自律システムとなるかを問うことになる(西垣 077)。したがって「『自律システム』は「観察者」を前提として成立する」(西垣 078)⁷。ただしこの「観察者」とは、「外側から客観的にシステムを眺めているのではなく、システムの作動にそった相互作用を介して、いわば内側からシステムを眺めるのである」(西垣 078)。

以下ではこのAPSの視点の転回やAPSの自律性に基づく基礎情報学を分析枠組みにして、情報という視点から『リヴァイアサン』を読み直し、社会システムすなわち国家が構成されるか、その機序を考察する。

【生命情報とは何か】

生命情報とは、前述のように生命にとってすべて意味のある情報であり、「生命体の内部にパターンとして出現し、記憶として構成されるもの」(西垣 073)である。しかし、「生命情報は生命体のなかに閉じ込められ、ヒト社会で通用する情報としてわれわれの前に姿を現すことはない」(西垣 073)。前述のように西垣は、こうした「潜在的・原基的な情報を生命情報のなかでも特に「原-情報」と名付ける。

ホップズも原-情報に相当すると思われる動物の運動の一つとして「生命的運動」を挙げている。「生命的 Vital」と呼ばれるこの運動は、「出生においては始められ、かれらの全生涯にわたってわたるたえることなく継続される。それは、血行、脈搏、呼吸、消化・栄養・排泄などの行程のようなものであって、これらの運動には造影力の助けは必要ではない」(傍点訳書)(ホップズ I 97)。これこそがAPSの特徴である自己産出である。生命体は、遺伝情報、代謝情報、免疫情報、神経情報などの生命情報にもとづいて自己産出を繰り返しているのである。

他方ホップズは動物のもう一つの運動として、「動物的 Animal運動」を挙げている。それは「意志による Voluntary運動ともよばれ、はじめにわれわれの心のなかで想像されたようなやりかたで、行き、はなし、われわれの四肢のどれかを動かすことなどが、そうである。・・・意志による行為は、つねに、どこへ、どの道で、何をについての先行する思考に依存するから、造影力が、すべての意志による運動の、最初の内的な端緒だということはあきらかである」(傍点訳書、下線引用者)(ホップズ I 97)。

【心的システム】

「造影力」を端緒とする、「心のなかで想像されたようなやりかた」すなわち「意志による Voluntary 運動」の「意志」こそが基礎情報学における心的システムである。「心的システムは『意識』を核にして成立し・・・知覚に基づく神経生理学的な現象、とくに脳神経の発火がもたらす『イメージ』や『シンボル』にもとづいてつくられる。とくに心つまりヒトの心的システムの構成素を『思考』と呼ぶことにする。思考は物理的実体ではなく、次々に算出されては消えていく『出来事』であり環世界 (Unwelt) を体内に取り込んで行為の予測に役立つための素材である。心的システムは物質的システムを構成しないので、生命単位体ではない。『思考』という抽象的な構成素を再帰的に産出するオートポエティック・システムである」(西垣 088-089)。この心的システムをもったAPSである生命体が人間である。

(2) 心的システムから社会システムへ

以下では、心的システムから社会システムすなわち社会状態がどのように立ち上がるか、まずホブズのいわゆる平等仮説から欠乏仮説、不信仮説そして戦争仮説へと一連の仮説群に基づきリヴァイアサンが立ち上がる過程を基礎情報学との対比で考察する。その際留意しておきたいのは、ホブズの視点が常に、外部の第三者の観察者の視点で記述されていることである。行為者であるヒトの内部に視点を移したとき、一連の仮説群がどのような意味をもつかが重要である。

【平等仮説】

ホブズは、「人びとは生まれながらに平等」であり、自然が人びとを身体においても精神においても平等につくったと主張する(ホブズ I 207)。では、平等か不平等か、どのように人びとは認識できるのであろうか。身体の外形的な大小は認識できたとしても、一見しただけでは相手の身体の諸能力やましてや精神の諸能力などわかるはずもない。たしかに多くの生命体では、他種間の平等・不平等の結果が、例えば天敵のように原一情報である遺伝子情報が本能として遺伝子に書き込まれる場合もあるであろう。しかし、生物的人間として人びとが相互に他者の身体の能力を知ることができるのだろうか。ましてや精神の能力の差などわかるはずもない。身体や精神の諸能力そのものが平等なのではなく、平等、不平等を認識できないという意味で、「人びとは生まれながらに平等」である。

平等、不平等が認識できるのは、他者との比較を通じて初めて可能となる。ホブズは、「もっとも弱いものでも、ひそかなたくらみにより、あるいはかれ自身とおなじ危険にさらされている他の人びととの共謀によって、もっともつよいものを殺すだけの、つよさをもつのである」(下線引用者)(ホブズ I 207)、という。「ひそかなたくらみにより」「他の人びととの共謀によって」とあるように、ホブズの議論は他者とのコミュニケーションが前提となっている。そこには基礎情報学でいえば、社会情報に基づく社会システムがすでに成立している。

他者との身体的、精神的能力の差に基づく優劣の認識は、身体的表現であれ言語的表現であれ他者とのコミュニケーションによって得られる社会情報があって初めて相互に認識できる。つまり、ホブズの人びとの身体的、精神的能力の平等性は、生命情報に基づく生命システム

における生物的人間の平等性ではなく、「たくらみ」や「共謀」などの社会情報に基づく社会システムにおける社会的人間における平等性である。

【欠乏仮説】

ホッブズは平等仮説を踏まえて次に欠乏仮説を提起している。ホッブズは紛争の原因の第一に競争を挙げている。すなわち人間は身体や精神の諸能力を相互に認識できないという意味において平等であるがゆえに、主として自身の保存 (conservation)、時には歓楽 (delectation) の達成に向け希望の平等が生ずる。したがって「もしだれか二人が同一のものごとを意欲し、それにもかかわらず、ふたりがともにそれを享受することができなるとすると、かれらはたがいに敵となる」(ホッブズ I 208)。

たとえば、食糧の欠乏である。ホッブズの生命的運動と動物的运动に基づけば、食料の欠乏で生ずる空腹に対する運動は、原-情報に基づく不随意的な生命的運動と随意的な意志による動物的运动の二つがある。たとえばカエルが空腹で餌に飛びつくのは原-情報に基づく不随意的な生命的運動と考えられる。他方人間が食糧を求める場合は、飢餓で生死の境にある者には食べるという行為は空腹のカエル同様に原-情報に基づく不随意的な本能的運動かもしれない。その一方で、今食べなければ餓死するという「造影力」つまり時間的概念をも取り入れた心的システム内での思考に基づく随意的な意志による動物的运动の場合もありうる。しかし、いずれの運動であるかは、第三者には決定できない。実は第三者の視点こそが、ホッブズにおける自然状態と社会状態の混乱が生ずる原因の一つである。

自己保存を目的とする運動は、基本的には生命維持のための本能すなわち原-情報に基づく生物的人間の不随意的、本能的な生命的運動であろう。そこには、相手の存在などない。ただあるのは自己保存のための自身の原-情報に基づく生命的運動だけである。

他方、「造影力」つまり心的システム内での思考に基づく随意的な意志による動物的运动の場合、今食べなければ餓死するという餓死寸前の人間が二人いて、食料が一人分しかなかった場合、つまり「もしだれか二人が同一のものごとを意欲し、それにもかかわらず、ふたりがともにそれを享受することができなるとすると」(ホッブズ I 208) という状況にあった場合には、相手が「同一のものごとを意欲し」ていることを相互に認識し、つまり二人の間に何らかの手段、例えば音声、表情、態度などによるコミュニケーションが生じており、しかも「ふたりがともにそれを享受することができない」という時間を考慮に入れた将来予測が成り立っていなければならない。基礎情報学に立てば、この状況はすでに二人の間に生命情報ではなく社会情報が成立しており、心的システムから社会システムが成立している状況である。

要するに、「もしだれか二人が同一のものごとを意欲し、それにもかかわらず、ふたりがともにそれを享受することができなるとすると、かれらはたがいに敵となる」という前提からは、生物的人間が作り出す自然状態と相互にコミュニケーションを交わす社会的人間が構成する社会状態の両方が考えられる。要するにホッブズの自然状態仮説の混乱は、生物的人間と社会的人間との区別が不明だったこと、そして第三者の観察者の視点から見ていたことにある。言い換えるなら自然状態か社会状態かは、行為者である人間の視点すなわち生命的運動にのみ依

拠する生物的人間か動物的運動に依拠する心的システムをもった社会的人間か、いずれの視点から見るかによって決定されるAPSの環境にほかならない。

【不信仮説】

ところで、自然状態であろうが社会状態であろうが、問われるべきは、それがどのような状況かということである。ホッブズは、それを「万人の万人に対する闘争」すなわち戦争状態とみなした。なぜ戦争状態になるかといえば、ホッブズは「不信から戦争が生じる」(ホッブズ I 209)と主張する。つまり、不信が戦争状態を生むのである。ではなぜ不信が生ずるのか。ホッブズによれば身体や精神の諸能力の平等から、目的を達成することへの希望の平等が生まれる(ホッブズ I 208)。その上で、前述の欠乏仮説を前提に、不信が生まれる。しかし、不信が生まれる前提には、利己心がなければならぬ。人間は利己的であることが前提となつて、だから身体的にも精神的にも平等であれば、希望の平等が生まれ、一人では十分だが二人では欠乏している状況で、利己心をもつ人間は相互に不信をいだく。

ホッブズは、人間は利己的であるという仮説については説明はせず、所与の前提としている。それは本当か。ルソーが批判するように人間には「自己保存の欲求を和らげる」「隣みの情」(ルソー『人間不平等起源論』71)があり、母親がわが子を護るために自らを犠牲にするように、相手のことを慮り自らを犠牲にすることはある。仮に利他的行動があれば、そこには不信は生じない。

仮に行為者にとって利己的行動であっても、観察者から見れば利他的行動に見えることがある。自らを犠牲にして子を護ろうとする行為は利他的であるが、しかし視点を変えれば、それは自らのDNAを子孫に残す利己的な行為とみなすことができる。利己的行動か利他的行動か、視点の問題でしかない。つまり利他的か、利己的かを決定するのは、第三者の観察者でしかない。行為者は生命情報にもとづき生命的運動を行うか、あるいは社会情報に基づき動物的運動するか、いずれかで行動する。しかし、その行動が利他的か利己的かは観察者の判断でしかない。行為者にとって利他的であることは同時に利己的であることは、マタイの福音「人にしてもらいたいと思うことを人に施しなさい」や、日本の「情けは人の為ならず」という黄金律に明白である。

さらに、ホッブズによれば不信が生ずる理由は、必ずしも欠乏からだけではない。というよりもむしろ自惚れや虚栄心を巡って不信が生ずるのである⁸。そのことをよく表しているのが、「人は人にたいして狼」との惹句が記されたホッブズの『法の原理』である。『法の原理』では、こう記されている。概略すると、自然〔状態〕にある人間はお互いに平等である。したがって平等以上のことを求めない人は穏健な人とみなされる。他方情念が多様であり、自惚れの強い人は他人と自分とが平等であることを認めようとせず仲間より優越したいと考える。したがって穏健な人は、かれらの餌食にならざるを得ない。「そこから人類間に一般的な不信が生じ、また人の人にたいする恐怖〔人は人にたいして狼〕の状態が生まれる(ホッブズ『法の原理』141-142)。不信の前提には、自惚れや虚栄心という他者からの承認という社会的価値観が暗黙裡に想定されている。

利己心であれ自惚れや虚栄心であれ、その前提には他者の存在があり、そこには社会システムが構成されている。

【戦争仮説】

ホッブズは続けて、「《不信から戦争が生じる》」(ホッブズ I 209)と戦争仮説を提起する。相互不信から自己の安全をはかるには、自らの安全を確保できる程度の力を持つことである。相手もまた、そのように考えるがゆえに、「人びとが、かれらすべてを威圧しておく共通の権力なしに、生活しているときには、かれらは戦争とよばれる状態にあり、そういう戦争は、各人の各人に対する戦争である。すなわち、戦争は、たんに戦闘あるいは闘争行為にあるのではなく、戦闘によってあらそおうという意志が十分に知られている一連の時間にある」(下線引用者、太字訳書)(ホッブズ I 210)。ホッブズは戦争状態を天候に譬えて、「戦争の本性も、実際の闘争にあるのではなく、その反対にむかう何の保証もないときの全体における、闘争へのあきらかな思考にあるのだからである」つまり、人びとが「闘争へのあきらかな志向」すなわち対立の状況にあるときに戦争状態である。

戦争仮説の問題は三つある。第一の問題は、人びとはどのようにして相手が「戦闘によってあらそおうという意志」を持っていることを認識するか。第二は、「かれらすべてを威圧しておく共通の権力」はどのようにして立ち上がるかである。第三は、「かれらすべてを威圧しておく共通の権力」が立ち上がったとして、人間の本性のなかにある「競争、不信、誇り」の三つの主要な争いの原因はどのように解決するのか。

(3) 社会システムの創発

ホッブズは戦争仮説から、共通の権力である国家すなわちリヴァイアサンを構想する。その過程を基礎情報学の社会システムの創発と比較対照しながら考察する。

【相互の意志の確認】

戦争状態において、第一に人びとはどのようにして相手が「戦闘によってあらそおうという意志」を持っていることを認識するのだろうか。情報学の視点から見れば、相互に認識しているということは、何らかの手段により人びとの間に社会情報に基づくコミュニケーションが成立し社会システムが立ち上がっているということである。つまり社会システムがすでに戦争状態にあるということである。自然状態か社会状態かは別にしても、ホッブズが説明する戦争状態は、平等仮説、欠乏仮説、不信仮説を積みかさねた上での「情念からなされた推論」(ホッブズ I 211)であり、人びとが「戦闘によってあらそおうという意志」を相互に認識していることは所与の前提となっている。

ホッブズが戦争状態を所与の前提としなければならなかったのは、ルーマンが指摘するように「合法的な政治的秩序の構成(ホッブズ)」(ルーマン178)つまり国家の構築には戦争状態は不可欠だったからである。またホッブズは戦争状態を「継続的な恐怖と暴力による死の危険があり、それで人間の生活は、孤独で貧しく、つらく残忍で短い」悲惨な状態と説明する。ホッブズのこうした価値拘束的な思考の背景には、ホッブズが生きた英国内戦の悲惨な経験等がある

のだろう⁹。

結局、ホッブズは戦争状態を平等、欠乏、不信の三つの仮説にもとづいて演繹的に考察しているが、実際にはペロポネソス戦争や英国内戦等の戦争状態を帰納的に分析し、人間の本性のなかに「競争、不信、誇り」の三つの主要な争いの原因を見出し、その前提として人間相互の平等、欠乏、不信を剔抉している。

演繹的であれ帰納的であれ、戦争状態を解消し平和を求める人々の諸情念すなわち「死への恐怖」、「快適な生活への意欲」そして「勤労によって快適な生活が実現できるという希望」(ホッブズ I 214) という価値志向的な思考がホッブズに「かれらすべてを威圧しておく共通の権力」すなわち国家(リヴァイアサン)の構築に向かわせたのである¹⁰。

【共通の権力の構築】

ではどうやって「かれらすべてを威圧しておく共通の権力」を構築するのか。これが、第二の問題である。これこそが、「人々が功利的に利害を追求するとき、いかにして社会秩序は可能か」という社会学における前述のホッブズ問題である。

ホッブズは人びとが戦争状態を解消し平和を求める諸情念すなわち「死への恐怖」、「快適な生活への意欲」そして「勤労によって快適な生活が実現できるという希望」という人々の間にある暗黙裡の共通の価値観を社会秩序形成の前提にしている。

他方、基礎情報学では、「かれらすべてを威圧しておく共通の権力」がないという意味での自然状態は存在しない。基礎情報学は「システムであるからにはコンフリクトもシステムに含める」(ルーマン179)ルーマンの社会学を援用しており、戦争状態という自然状態もまた社会システムに包含されるからである。つまり戦争状態すなわち「社会秩序の不確かさ」(ルーマン180)もまた平和状態すなわち「社会秩序の正常さ」(ルーマン180)も社会状態の部分でしかない。実際ホッブズも、戦争状態と平和状態を雨や晴れの気象状態に譬えている。晴れや雨が気象の変化でしかないように、戦争も平和もまた社会秩序の一面でしかない。つまり問われるべきは、ホッブズが問うたようななぜ戦争状態になるかではなく、なぜ社会システムが成立するかである。

【HACSとは何か】

ルーマンの社会学のコミュニケーション概念を援用する基礎情報学では、主体間の水平的コミュニケーションに焦点を当てるルーマンとは異なり、自律したAPSである生命体間の階層的なコミュニケーションにより形成される階層的自律コミュニケーション・システム(HACS)として社会システムの創発を説明する。

西垣はHACSを次のように説明する(西垣 b 031-033)。

第一は、「単独のシステムではなく、われわれヒトの心的システムと構造的カップリングした『複合システム』である」。第二は、「階層性をもつ」。第三は、「構成素が『コミュニケーション』である」。

西垣はコミュニケーションを「対話者の『記述(メッセージをふくむ)』をベースに織りあげられるのがコミュニケーション」と定義する。ここでいう記述とは、「ヒトという生命単位体と

構造的にカップリングした本人の心的システム（観察者）が、知覚系を通じて体内に刻まれた原－情報から刺激を受け、構造変化として抽出した『情報』を何らかの伝播メディア上に記したものである」（西垣 131）。

西垣のコミュニケーションとはほぼ同様のことをホップズは『リヴァイアサン』「第六章 ふつうに情念とよばれる、意志による運動の、内的端緒について。およびそれらが表現されることば〔について〕」において、知覚系を通じて「生命的運動」に基づく原－情報から刺激を受けて、構造変化として抽出した「情念」やそれを記述することばについて考察している。しかし、西垣と異なりホップズは「伝播メディア」としてのことばについて論述したものの、人びとの間でどのように情念が伝播するかについては必ずしも触れていない。前述のように、平等仮説、欠乏仮説、不信仮説のいずれもが表情などの身体的言語も含めた相互のコミュニケーションがあってはじめて成立する。また人びとの間の契約にもとづいて立ち上がる国家もまた、契約において人間相互のコミュニケーションが不可欠である。しかし、ホップズは契約の意味や方法、形式など観察者（第三者）の立場にたって論述してはいるが、契約の手段であるコミュニケーションが人々の間でどのように交わされ契約が結ばれるか、行為者（当事者）の立場にたって記述してはいない。

契約が社会システムの構成する要素となっているホップズの『リヴァイアサン』と異なり、基礎情報学では情報を伝播するコミュニケーションという手段こそが生命システム、心的システムそして社会システムを構成する要素となっている。つまり基礎情報学では、「情報を意味するもの」（シニフィアン）、すなわち契約行為におけるコミュニケーションが、ホップズでは「情報で意味されるもの」（シニフィエ）すなわち契約内容が社会システムを構成するのである。

基礎情報学では「人間の社会的組織そのものがコミュニケーションという出来事の連鎖として形成／維持されていく」（西垣 b 040）。「コミュニケーションはコミュニケーションを再帰的に産出することによって社会システムが成立しており、一方、個々の人間の心的システムは、これとは対等のAPSと位置づけられるのである。そして両者は『相互浸透』の関係ということになる」（西垣 b 060）。そしてHACSの最大の特徴は、生命システムから心的システムそして社会システムまで、すべて情報にもとづいて、主観的に構成することである。その社会システムの一つが、たとえば新聞という伝播メディアによって「想像の共同体」として生み出された近代国民国家である（西垣 b 199）。国家をリヴァイアサンという「人工的人間」として実存的に創造したホップズとは異なり、「ラディカルな構成主義」である基礎情報学は国家を間主観として構成している。

しかし、社会システムは個々人間の心的システムのコミュニケーションの連鎖によって再帰的に形成／維持されている。西垣によれば（西垣 b 061-063）、だからと言って社会システムと心的システムを全く対等に扱うことはできない。なぜなら、個々の人間は法律や会社での規則など、社会から多様な拘束／制約を受けているからである。したがって社会システムは心的システムの上位にある。しかし、心的システムは、自由に思考できるという意味で、自律性をもつ。つまり階層的かつ自律的なコミュニケーション・システムが「伝播メディア」によって社会シ

システムをつくるのである。

では拘束／制約はどのようにして形成されるか。「基礎情報学では観察者の視点を入れた自律システムをベースにすることによって、拘束・制約関係にもとづく階層的オートポエティック・システムを定義することができる。・・・このことは、個々の心的システムからすれば、情報に関連する社会的権力の出現となる」(西垣 a 212)。つまり拘束／制約、それに基づく社会的権力関係はいずれも観察者の視点であり、心的システムとしての行為者から見ればあくまでも自律的である。この視点を行為者に移した自発的で相互に拘束／制約する社会的権力関係こそ、ルソーが主張した「一般意志」にもとづく社会システムではないのか。

【HACSとルソーの一般意志】

前述のように、利己主義を人間本性の所与の前提におくホッブズを批判するルソーは、こう記す。「・・・各人は自己をすべての人に与えて、しかも誰にも自己を与えない。そして、自分が譲りわたすのと同じ権利を受け取らないような、いかなる構成員も存在しないのだから、人は失うすべてのものと同じ価値のものを手に入れ、また所有しているものを保存するためのより多くの力を手に入れる」(ルソー 『社会契約論』 30)。心的システムを持った各人が行為者として「自己をすべての人に与えて」という一般意志の本質である徹底した利他主義を実践した結果、観察者から見れば社会的システムが構成されるのである。

「われわれの各々は、身体とすべての力を共同のものとして一般意志の最高の指導の下におく。そしてわれわれは各構成員を、全体の不可分の一部として、ひとまとめとして受け取るのだ。この結合行為は、直ちに、各契約者の特殊な自己に代わって、一つの精神的で集会的な団体をつくりだす。・・・この公的な人格は・・・共和国または政治体という名前を持っている。それは構成員から国家とよばれ、能動的には主権者、同種のものとは比べる時は国とよばれる。構成員についていえば、集会的には人民という名をもつが、個々には主権に参加するものとしては市民、国家の法律に服従するものとしては臣民とよばれる」(ルソー 『社会契約論』 31)。社会契約の内容ではなく社会契約の行為によって「共通の権力」国家が構成される。そして構成員は市民として主権を行使する一方、臣民として国家の法律に拘束／制約される。これこそまさにHACSによる社会システムの構成ではないのか。

またHACSは、前述の戦争仮説の第三の問題すなわち「かれらすべてを威圧しておく共通の権力」が立ち上がったとして、人間の本性のなかにある「競争、不信、誇り」の三つの主要な争いの原因はどのように解決するのか、という問題の解決の糸口を与えてくれる。ホッブズは必ずしも明確にはこの問題には答えていない。ただ自然法にもとづく契約内容を考察するだけである。ルソーの一般意志を基礎情報学から明らかにしたHACSに基づけば、心的システムの再帰的かつ連続的なコミュニケーションによる契約行為が争いの原因を縮減する。

おわりに

以上基礎情報学からホッブズの読み直しを行った。それは観察者から行為者への視点を転換し、そして行為者である生命体としてのヒトから心的システムをもった人をへて国家がどのよ

うに立ち上がるかを問う作業であった。ホッブズはあくまでも、力学のパラダイムのなかでヒトの感覚や心的システムをもった人の情念を考察し、擬似生命体であるリヴァイサンを実存的に構築した。その結果、『リヴァイアサン』には生命体を力学のパラダイムで分析することの限界や、国家の人格化に見られる誤謬そして何よりも主権の相互譲渡による共通の権力の構築というホッブズ問題というアポリアが生まれてしまった。ホッブズ問題は、APSを応用したルーマンのコミュニケーション論で解決されたといわれる。基礎情報学はそのルーマンを援用し、最終的にはルーマンのシステム論とは異なるHACSを提案した。そしてこのHACSはルソーの一般意志にもとづく社会システムの創発に道を拓く可能性を秘めている。事実西垣は、東浩紀『一般意志2.0』を批判的に継承しながら、『ネット社会の「正義」とは何か』で集合知に一般意志を求める試みをしている。

本研究ノートの第一の問題意識は、ホッブズを始祖とする近代政治学の問題は理性的、合理的な社会的人間の関係を重視し、生物的人間の考察を軽視していたのではないか、ということにあった。生命体から社会システムという基礎情報学のパラダイムであらためてホッブズを読み直すと、いかにホッブズが心的システムとしての情念を重視していたかがわかる。にもかかわらず近代政治学が情念の視点を軽視してきたのは、科学化を数値化ととらえて、すべてを数字に還元してきた近代科学の悪弊による。数値化できないものは近代科学は軽視、無視してきたのである。

本研究ノートの第二の問題意識は、人間の本性と、そこから類推された国家の本性的問題である。基礎情報学によれば国家の本性は人間の本性の類推ではなく、生命情報から社会情報への転換として理解できる。つまり、国際社会の国内類推という問題は、基礎情報学に従えば、国内、国際の区別なく一つの社会システムとして捉えることができる。この視点の転換によってはじめて国際社会は自然状態であるという国際政治学のドグマを解消できる。国家間も含めすべての主体が情報によって、グローバルな社会システムを間主観的に構成しているのである。

このように基礎情報学から『リヴァイアサン』を力学的パラダイムではなく、生物学から誕生したAPS、それに触発されたHACSによって読み直すことで、ホッブズ政治学が情念の政治学であることが明らかになった。また、ホッブズを批判するルソーの一般意志もHACSによって説明が可能となる。このことは、社会契約論全体を基礎情報学で改めて解釈しなおすことができる可能性を示唆するものである。

(了)

【注】

- 1 ホッブズは『市民論』で、「人間の本性の諸能力は、体力・経験・理性・感情の四種類に還元することができる」(ホッブズ『市民論』31)と記している。また『法の原理』では、「人間の本性とは、要するに栄養、運動、生成、感覚、理性等々の諸能力、つまり自然的な諸能力および諸力のことであります」(ホッブズ『法の原理』20)。
- 2 ホッブズは理性を「うたがわれぬ神のことば」(ホッブズ III 25)とみなしている。
- 3 E・H・カーが指摘するように、国家の人格性というのは、・・・国際法学者が、国家について『要

- 請される性質』と呼んだところのものである。それは必要な擬制ないし^{ママ}仮設である一発達した社会の構造を取り扱うために、人間精神が案出した実際に必要な道具である」(カー 275)
- 4 たとえば、古くはアルバート・ヒルシュマン『情念の政治経済学』(1985)。最近では、『思想』(2010年5月)が「情念の政治」の特集を組んでいる。その中で射場瑞樹が「トマス・ホップズにおける情念と政治」で、『法学要綱』、『市民論』そして『リヴァイアサン』のホップズの著作を情念という視点から読み直しを行っている。同様に山本隆基も「トマス・ホップズの初期政治思想：自然法・情念・国家」でホップズの初期政治思想を情念の視点から読み直しを行っている。
 - 5 伝播メディアを西垣は次のように定義する。「通常言われる『メディア』に近いが、音波、文字、画、電波といった物理的要素のみならず、郵便、テレビ放送、新聞、雑誌、書籍、映画といった社会的要素をも含んでいる。すなわち、技術のみならず、社会制度によって成立しているものである」(西垣 a131-132)
 - 6 西垣は「オートポイエティック・システム」と表記しているが、一般には「オートポイエシス・システム」と言い習わされている。
 - 7 ただし、自律性における観察者の視点については、APSを「自分自身を規定しうるシステム」(河本 158)とみなす河本は不要とみなしていると思われる。観察者の視点を取り入れたことで、西垣はAPSの視点の転回に依拠しているものの、一般的なAPS(そうしたAPS論があるかどうか、APS理論がさまざまに概念的発展を遂げているために必ずしも明確ではないが)ではなく、前述のように、HACSという概念を提案している。
 - 8 山本隆基は、ホップズの初期政治思想において自惚れや虚栄心の情念が、どのように紡ぎだされたのか、ホップズが翻訳したツキジデスの『戦史』からルネサンスのマキャベリやベーコンなどルネッサンスの思想家の著作を踏まえて考察している。
 - 9 ホップズの戦争に対する価値拘束的な思考の背景について、射場瑞樹が情念という視点から詳しく考察している。
 - 10 ルソーは、自然状態を戦争状態とみなすホップズを批判している。言い換えるなら、自然状態は戦争状態とも平和状態ともみなすことができる。いずれにせよ、自然状態仮説は政治的秩序をいかに構成するかの原点となる仮説でしかなく、君主制を擁護するホップズ、共和制を支持するルソーと、構想する政治秩序の違いによって、自然状態の内容が対立か協調かが決定する。

【引用文献】

- カー、E・H(著)、井上茂(訳)(1996)『危機の二十年』岩波書店
 河本英夫(1995)『オートポイエシス』青土社
 柚正夫(1975)「生物学と政治学」『法学研究』九州大学(42〔2-3〕)
 柚正夫(1976)「生物学と政治学Ⅱ」『法学研究』九州大学(43〔1〕)
 西垣通a(2004)『基礎情報学』NTT出版
 西垣通b(2008)『続 基礎情報学』NTT出版
 ホップズ(著)、水田洋(訳)(2004)『リヴァイアサン』(I~IV)岩波書店
 ホップズ(著)、田中浩、重森臣広、新井明(訳)(2016)『法の原理』岩波書店
 ホップズ(著)、本田裕志(訳)(2008)『市民論』京都大学学術出版会
 ルソー(著)、桑原武夫、前川貞次郎(訳)(2003)『社会契約論』岩波書店
 ルソー(著)、本田喜代治、平岡昇(訳)(1999)『人間不平等起源論』岩波書店
 ルーマン、ニクラス(著)、佐藤勉(訳)(1997)『社会システム理論(上)』恒星社厚生閣

【主要参考文献】

- 東浩紀 (2011) 『一般意志2.0』 講談社
- 西垣通 (2014) 『ネット社会の「正義」とは何か』 KADOKAWA／角川学芸出版
- ヒルシュマン, アルバート (著)、佐々木毅・旦祐介 (訳) (1985) 『情念の政治経済学』 法政大学出版局
- ブル, ヘドリー (著)、白杵英一 (訳) (2000) 『国際社会論』 岩波書店
- 的射場瑞樹「トマス・ホッブズにおける情念と政治」『思想』 (2010年5月) 岩波書店
- 森川友義 (2008) 「『進化政治学』とは何か?」『年報政治学』 早稲田大学
- 山本隆基「トマス・ホッブズの初期政治思想：自然法・情念・国家 (1)」『福岡大学法学論叢』 57 (1), 35-94, 2012-06
- 山本隆基「トマス・ホッブズの初期政治思想：自然法・情念・国家 (2・完)」『福岡大学法学論叢』 57 (3), 293-356, 2012-12